小田原史談
第80号
発行所　小田原史談会
小田原市西栢山3310

相模国初期国府と国分寺の所在地はどこか

内田武雄

小総駅について

小総駅は地名辞書では今の小田原市酒匂にあてている。石野瑛氏は二、三の著書の中で国府津町にあてている。又片岡永左衛門にも説があって、下中村の小竹（小田原市小竹）にあてている。もし小総が、小施の地名を和銅六年好字の詔によって、小総としたならば酒匂でなくてはならないだろう。

酒匂宿は今の浜辺ではなく、さきにのべた今の二号国道附近とするならば坂本（関本）から小総に出る路と御殿場附近の横走駅より乙女峠をこえて仙石原から宮城野の碓氷峠、舟原から久野の坂下、多古の出戸橋から酒匂川を渡って今の新田の土手に出る、ここに石仏を祀った小施小屋があった。（昭和の初めまでこの石仏につかえていた土手松さんと言うお坊さんの居た所である）

さきにのべた和銅六年好字の詔によって小施の地を小総としたならば、やはり地名辞書の言う小総は酒匂でよいと思われる。

これより路は酒匂宿で足柄の坂本より来る道と横走駅より久野を通って酒匂宿で一しょになったものと考えられる。

又久野は県下でも有数の後期古墳地帯に属するが当時にあっては現在のような袋小路的地でなかったことを意味していよう、従ってこの道は恐らく縄文時代頃からの古道であったろうが国府の設置と共に一時栄え国府の移転と共に、その繁栄を足柄峠に譲ったものようにも考えられる。尚この道の盛衰と共に駅路の上に於ても変遷があったのではなかろうか。国府推定の地は先きに述べた、和名抄に言う高田郷に第一次国府があったものと私は思っている。

当時の宿場もいろいろかわり、あるいは酒匂宿とそのとなりの地、今の前川の本屋敷と言われる所のそのさきに駅家があった時代もあったであろう。

今は小田原市前川の飛地と言っているが、走湯山所蔵、明徳元年の文書に走湯山雷電社、社領相模国厩河村と見えている、この所が駅家があった所ではなかったろうか。

今の国府津の天神様の前の地が伝馬屋敷で伝馬は十二頭いたことを知るした絵図面ものこっている。元国府津の片岡村の地と高田、田嶋の国府の港のまわり一帯に今でも舟免と言う地名がのこっしいる、これは国府の港の舟に附いては税金を免除したことを物語っている。又田嶋の地名に舟子と言う所がある。これは国府の港に舟主がいたので、その附近にせんどうがいたであろ。

大和物語に出てくる小総は海辺の小駅であったようである。当時は酒匂宿でも厩河村の駅家でも海辺であったろう。

今の国府津病院附近の地名が、さかい岸になっているので当時は海辺が近かった事も想像ができる。この駅家も酒匂宿も国府の移転によって駅路もかわって、酒匂宿は今の浜辺に、厩河村、駅家は今の前川村の東へよぎなく移転せざるをえなかったのであろう。

奈良時代にはこの駅家のすぐ東が国府の港であるから問屋場からの荷物もかんたんに積おろしもできたであろう。

これより森戸（守戸）に出る、ここは当時の関所で舟で来た人又は積荷などもここで調べたのであろう。

今でも森戸関口などの地名ものこっている。当時衛府（関所）は五衛府であるから第一が中曽根、次が成田の守、第三が右衛門府の矢作、次が高田の左衛門府、第五が森戸（守戸、守る渡しとも言う）関口にあったこれから道は国府津山をこえて羽尾に出たのであろう今の宝金剛寺も当時は国府津山上にあったと言われているので旅人も道中の安全を祈願して一休みの後遠くは房総を初め伊豆の山々、相模灘には大島の三原山から立ちのぼる噴煙、黄金の波のただよう足柄平野、目の下には国分寺のいらかや塔の九輪もまばゆいばかりいつまでもいつまでもつきぬながめであったろう。足柄平野をゆっくり展望の後に次の宿場を目ざした事であろう。

延喜式の駅路が大体奈良朝の駅路を襲っているとするなら、相模の国府が海老名にあった場合駅路は直接東に国府の地に向うべきではなかろうか。即ち坂本から秦野、伊勢原の道をとるのか順路であろう。

それが坂本から小総駅に出て海岸沿いに二宮町国府の地（平安後期移転した余綾の国府の地）に大迂廻する必要が何故あったのだろうか、私の知るかぎりこれまでの歴史家がこの疑問に触れていないのは私の不注意の見逃しであろうか。そしてこのように考えた場合一ばん都合がよいことは、延喜式の駅名の順序に不自然さがみられなくなっていくことである。海老名の国府の場合では前述のように坂本駅より小総に南下する理由の説明がつきがたいことである。

訂正

前号にてお知らせしました顧問に内田武雄氏が脱落しておりましたのでお詫びいたします。

六花苑系譜の疑点について

伊東浩

六花苑とは俳人、松木乙児の庵号に始まり特に小田原、南足柄地区の俳人によって、この庵号が継承され

同地区には因縁深いものがある。

初代六花苑乙児は、駿府の豪商の家に生れ、松木五郎右衛門と称し、宝暦十二年（一七六二）三十九才の時江戸に出で、隅田川のほとりで剃髪し「秋の水娑婆の姿を見て置ん」と詠み、これより俳句三昧の境に入り、明和九年四月五日（一七七二）四十九才で歿した人である。

この六花苑系譜について郷土の俳史研究家、故飯田九一氏は「郷土の俳史」に六花苑を次の如く正系と傍系に区分された。

正　系

松木乙児―釈官鼠―円城寺嵐窓―杉崎嵐泉―関野嵐角―清水嵐峰―井上嵐志

傍　系

半時菴淡々―五竹菴木僊―円城寺嵐窓―兆斉―桃僊―蘭径―荷笠―一蓑―梅僊

疑点の一つは、この傍系の一世淡々と二世木僊で、二人は六花苑を菴号としたことがない、殊に淡々は乙児より、五十才年長で乙児が江戸に出る前年、宝暦十一年十一月二日（一七六一）八十八才で歿している、しかるに、六花苑の傍系の一世、二世に列記された点である。

一方駿河郷土史研究会の鈴木富男氏は「富士市における化政期の文化」と題する論説に六花苑の起原を次のように記述されている。

「乙児は姓を松木といい梅富軒渋谷六花（大宮町出身）の弟子で師匠の名をとって、六花庵と号した、師匠の渋谷六花は寛文十一年（一六七一）大宮町に生れ父を玄知といった。六花は服部嵐雪に師事し、沼津に住んで俳諧活動に専念し、寛延三年（一七五〇）一月七日七十九才で歿した」とある。

私は先年六花苑の系譜を南足柄市中沼の石井竹水氏から受継いでいることを聞き同氏にその系譜と称する一巻を見せていただくことができたので、要点を次に記す。

この巻物は、四世兆斉が門弟桃僊の立儿の免許として書いたものである、従って最初は次のように立儿の免許である。

立儿免許之條

（内容省略）

四世六花苑兆斉

干時安政六己未年

仲冬　下浣

桃邈雅禅」

次の章は俳諧の席上に於ける、芭蕉の注意事項とその入手状況が、次のように書かれている。

「俳諧之開会席上に於ける注意事項

（内容省略）　芭蕉　在判

本式古式終

宝暦九己卯年

右晋子其先生箱中より及書写也　半時庵淡々」

次の章は左の如き俳諧の伝系である、実はこの伝系が系譜と誤解して、伝えられたのではないかと推測する。

「俳諧之伝系

貞　徳

秀　吟

芭蕉翁　桃青

宝晋斉　其角

半時庵　淡々

五竹庵　木僊

六花苑　嵐窓

六花苑　兆斉―

要するに、この巻物は立儿の免許を与えるに付、俳諧の席上に於ける作法を伝授し、終りにその伝系を書き添えたのである。前述の如へこの伝系と、六花苑の系譜とは全く別なもので、一例を三世嵐窓にとれば、立儿の免許は木僊に受け、六花苑は二世官鼠より継承し、また沙羅の教も受けたのである。

疑点の二つは、昭和七年南足柄市飯沢の梶氏邸内に建碑された、六花苑七世荷笠の句碑に書かれた、世代に誤りがあるので次に記す

「六華苑桃僊翁門下有三哲曰蘭径日荷笠曰一蓑順次皆継嗣後席矣（以下省略）又以承九世一蓑翁之後故弗能辞也、因而表焉

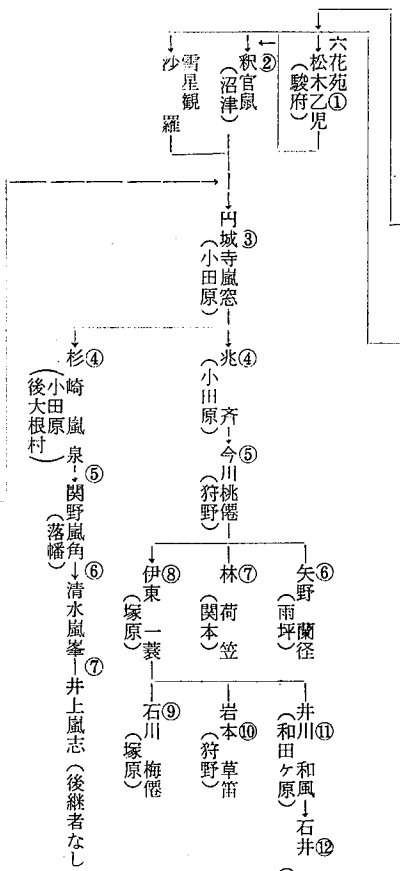
昭和七年四月　拾世六華苑栂僊謹誌」

この文中、桃僊翁は五世蘭径は六世、荷笠は七世、一蓑は八世と碑文にある如く、順次その後席を継いだのである。

しかるに、碑文の作者梅僊は、八世一蓑を九世とし九世の己を拾世と誤記しているのである。なおこの碑文の作者は検討する余地もあるが、何れにせよ、この誤りの根源は、南足柄市塚原の天王院境内に、大正十二年に建碑された八世一蓑の句碑に、九世と誤刻されていることに起因したものと推測する。

よって、六花苑の系譜とその関係を次表のように作製した。

六花苑の系譜とその関係



参考文献

一、飯田九一著郷土の俳史

二、神奈川県郷土資料集成第三輯、俳諧篇

三、駿河郷土研究誌第二二号「富士市における化政期の文化」鈴木富男著

四、俳諧人名辞典　高木蒼梧著

（昭和五十年十月二十日記）

鉄

栢木次郎

(1)

長い人類文明歴史の中で最も身近で最も用途の大きい物の一つに鉄があります大半を人類と共に歩んで来た鉄は今日の近代的諸生活に於ける日常用具から建設機械に至るまで巾広く活用されています。

私達の日常茶飯事の身の回り品の大半は鉄の加工品である。

そして我が郷土史に於ける鉄の歴史は例外ではありません、我が郷土小田原地方に於ける鉄の遺跡は酒匂地区の鍛冶分、三竹山中のタタラド、南足柄の千津島山北の鍛冶屋敷、湯河原の鍛冶屋、小田原の鍛冶屋敷等とである。

小田原地方に於ける鉄の資料は何分にも不足致して居ますので詳細を知ることは今の段階では難である。ですが鉄の研究を進行させて居ませんのであえて此処に研究調査する次第である

所は酒匂地区に於ける鍛冶の開始は元禄以前と推察する、其は新編相模国風土記に次の様に掲載されている。酒匂鍛冶分左可和加知婦興酒匂村より分れし地なり、元禄の改めに始めて村名を載す、高縄に四十石餘にて四域彼の村に包まれ、民家錯雑して一村の如し、もと鍛工四十二軒餘住居せしかば、地名となれり、今は戸数六十二の内、鍛工を業とする者縄に七戸のみなり、江戸よりの行程、領主検地等総べて酒匂村に異ならず。

酒匂鍛冶分の歴史も明治初頭に於て消えて行く、同金山社も明治十年四月に村内の八座（八幡神社、諏訪神社、金山社、雷電社、神明社、白山社、十二天社）を駒形社に合祀し酒匂神社と称するに至る。

此酒匂鍛冶分より出土する鉄滓はかなりの量である。酒匂神社境内から酒匂中学校に至る道程には大量の鉄滓が散乱している。研究当時（昭和三六年四月五日）は此の鉄滓を見て何んだろうと不思議に思った。そして今日に研究が追求されますと此の鉄滓の正体が明色になって来る、元禄以前に酒匂地区に於いて製錬していたことが分かり、さらに酒匂大経寺の裏の川の改修工事の時大小さまざまなフイゴの羽口（土製）が出土した、いずれも川底である。

同時に灯明皿や寛永通宝といった出土品もある。製錬に便用した鉄（砂鉄山砂鉄）をどこから移入したのかである、此の地より産出（特に採集）するのは砂状の砂鉄であって本来の粒状の砂鉄ではないからである元来砂鉄と称するのは岩間にある粒状の砂鉄を意味し普通の川砂鉄や浜砂鉄類は質の程度も落ちるからである。此れ等砂鉄には不純物が入りまじって質的にも悪い、以上の点から見て酒匂地区から産出した物ではなく近在近郷の産出地から移入したのではないかと思うつまり砂鉄七里に炭三里というように現状では炭の遠方への輸送がきかないし、又砂鉄の遠方輸送が可能であることを意味している。

砂鉄よりも炭の方が手にすることが難であるし、製錬所の付近には雑木林を所有することもある、しかし近世になってこの方にも多少異なる。必要な製錬に必要なる炉の粘土や石等が自然に必要となる、特にフイゴで送風する時必要なのは羽口である、羽口は直接鉄にふれるために土製でなくてはならないからである。

出雲国飯石郡吉田村の菅谷鉄山の記録に次のことが記されている（鉄玄川昭二著より）

「往古！製錬法ハ到ル処鉄砂ヲ積堆シ、薪材ヲ投ジテ之ヲ焼キ、以テ鉄塊ヲ作リシモノノ如シ、其ノ後野炉ト称シ、粘土ヲ以テ炉形ヲ構造シ、鉄砂ヲ此ニ運搬シ、或ハ鉄砂ノ附在ニ野炉ヲ設ケ、焼キテ以テ鉄類ヲ製造セリ」

以上の記録から見て鉄の製鉄のことが詳細に記されている。

酒匂地区のタタラは家屋であったことは山腹を利用した野タタラからしだいに低地に移った事情からである。

酒匂鍛冶分の詳細資料不足のために皆様にとっては分かり兼ねますが引続き研究調査を実施致しますので皆様の御協力を御願い致します。そして小田原地方に於ける鉄に関した関した研究が開かれることを願うものである。

鉄については研究進行の段階で詳細が分って来るでしょう、酒匂地区に於けるタタラも同様であることは御承知のことと思います。酒匂鍛冶分から出土する鉄滓の分析や原料と色々な解明されない謎があります。

私達は此の謎を解くため日夜努力しなければなりません、鉄の原料となる鉄鉱石、砂鉄の産出地又製錬に必要なる炭の移入地等。これらの研究は我が郷土史にとって必要な研究の一つであると同時に最も身近かにみる鉄の歴史を知ることも大切かと思う次第であります。（扶桑文化研究会）

随筆

全国に同名「小田原」が数多くある

額田喜代春

近頃「姉妹都市」という言葉を各方面で、たびたび聞かされるようであるが、

小田原町という当小田原市と同じ町名が、わかっただけでも、次の通りあるのには驚いた。

一、宮城県仙台市小田原市（小田原牛小屋町、小田原袖振町など十八町に分かれる）

二、東京都中央区小田原町（一丁目、二丁目、三丁目）

三、神奈川県箱根町箱根字小田原

四、山梨県塩山市小田原（上小田原、下小田原）

五、愛知県豊橋市小田原町（東小田原町、西小田原町）

六、名古屋市中区小田原町（一丁目、二丁目、三丁目）

七、京都市下京区小田原町

八、滋賀県大津市大石小田原町

九、和歌山県高野山小田原

などで、他にもしらべれば、まだまだあるかも知れないが。

なお、全国各地の小田原について調べた処、前項(二)の東京都中央区の小田原町は、江戸時代の初め慶長の頃、我が小田原から江戸城構築のために早川の石工業者が集団して、江戸に移住して作った元小田原町と、漁業関係者が移って作った小田原町との名残りの町名だそうである。

(三)の箱根町の小田原は、元和年中に幕府が芦ノ湖畔に箱根関所を開設したとき関所の西側に箱根宿を置くことになり、小田原、三島の両宿の人々を此の地に移住させて宿駅を作ったので宿内を小田原町、三島町と二つの町名に分けて、名付けられたのだとのこと。

＝つづく＝

九州の大親分（侠客）（上）

井上英一

昭和弐年九月、暑い夏もソロ〳〵終りに近く朝夕冷しい風が吹き初めた頃であった。

私は一人で東海道線の下り急行の二等車に乗っていた。大阪は夜中に通過して翌朝下関に着くと直ぐ連絡船に乗り換へ門司に上陸、それより又汽車にて長崎へと向ったのである。そして長崎市反町にある目的の家堺屋儀三郎氏宅に無事着きました。

初めての訪問です、私が長崎まで来た用件と言うのは二、三日前堺屋氏から手紙を貰ったのです。

それは私の直ぐ弟の二朗が小田原中学校を卒業しまして東京の青山学院に入り卒業すると直ぐ九州長崎市の或る商業学校の英語教師として赴任したのでした、そして下宿がこの堺屋氏宅と言う訳、処が半ヶ年経った今日に於て其の弟が病気にかかり、少し重い病勢だったので市内の病院へ入院させたから直ぐ来て欲しいと言う文面、私共家族はビックリしました、特に母は心配して私に直ぐ行く様にとの事だったので長崎へ来た次第である。

本人の病気は良くなく院長先生の話では胸が悪いので相当の年月がかかる様ですから故郷へ帰って自宅療法させなさい、若しそうならばベテランの看護婦をつけて上げましょう。と言う事でしたので私は其の意に従い、三日間ほど堺屋宅に御厄介になって其のスケジュールを組みました。

即ち私は直ぐ小田原に帰って当分入院さすべき必要から横浜の病院へ入院手続を取る事、それから本人と看護婦は二日後れて長崎港から横浜駅まで汽船で帰り上陸すると直ちに入院させる事等を打ち合せをしたのでした。

そして其の通り実行しました。其の三日間、私が滞在中は堺屋御夫妻には一方ならぬ親身も及ばぬ御世話になりました、今以って感謝に堪えぬ次第です。

仰も堺屋儀三郎氏は如何なる人物であるかと言うと最初私が訪問した際、先づ通された部屋は二階の離れ部屋の六畳間、これが弟の部屋だったのである、夜になると主人只一人これも二階の十八畳間の中央に寝床を敷き大の字なりになって寝る、奥床間を見ると、なんと大小の刀が十二、三本立て掛けてある、此の戦争中刀剣類の強制供出しなければならぬ時代に此の家ではそうではなく刀が多数あるなんて私はビックリした又同時に不思議でならない如何なる考えをこの主人は持っているのだろうか、と翌朝食事の時伺ってみた。

お話は夜にしましょうやとの返事。

扨て其の日の夜となる、次から〳〵へと話はつづくのであった。

井上さん!!私は満州で生れて満州児なんです、十五才の時、或る事件で義侠心を起し一人の日本人を殺した、そして部落の難を救ったのです。

然しとう〳〵居たゝまらず密行船に乗って内地へ逃げて来ました、そして上陸したのがこの長崎でした。

其の後数年間は種々の事情がありましてね、大阪のA親分の処へ行ったらどうかとか、下関の親分ならお前には気に入るだろうから世話になれよ、とか色々と言ってくれる人があったが、自分は此の地で一カ八カやってみるんだと頑張ってトウトウ今日迄来て仕舞ったのです、そしてあれは確か大正二年だったでしょうかあなたも御存知の通り此の港の沖に小島が見えますねあそこに三菱造船所があるのです、そして私も二、三十人の子分が出来て居たので其の会社の関係仕事をして居たのです。或る年下請工事の入札がありました。

私は充分其の仕事には自信がありましたので、初めて入札に参加しました。処が一流組や二流組には落札せず私の処へ来て仕舞ったから大変、勿論私は大喜びでした。然し他の大組の連中にとっては大番くるわせでしょう、

けん〳〵ごう〳〵の騒ぎが始まった、そして夕方近く私は只一人スタコラと家路へいそいで近道であるあのトンネルを通って歩いて来ました。何しろ長いトンネル故中央は真暗です、普段通いなれた道とは言へ何となし今日は寂しかった。

丁度中央あたりへ来た時前の方から一人の人が来る気配がした、彼は懐中電灯を照らしながら私の横を通り絲ぎたと思ったらパット電灯を消し、いきなり私の後から小刀（ドス）で背から前の腹まで通れと突き刺したのです。

私はビックリしたと同時に倒れました、男は逃げて行きます、私は直ぐ起き直って　まて!!と声をかけた様な気がして居たと思いますが、何しろ深い痛手を蒙ったので暫時は身動きも出来ず疵口をおさえて居たのですが、其の内漸く起き上る事が出来たので歩き始めました。そしてトンネルを出て検門所前まで来ますと監視人が

「あなたどうしましたか？大変な怪我の様ですね、アア？誰かにやられたね？」

「監視人さん!!ころんだんですよ、あの暗いトンネル中で、誠にすみませんが手拭二、三本あったら借して下さいよ、傷口をおさえるのにね！」

「何に!!ころんだ!!何しろ重傷を負って居るんだから早く向う岸へ着いて病院へ行き給へ、今船を出してやるから」

船頭に言いつけて船を出させてくれたのです。

処で入院でもすれば医者から何かと問はれ、ウソは言へないと思ったので、何処までもころんで怪我をしたんだと心に決め、家に着き早速床に入った。

そして一ヶ月ばかりは外出しなかった、そして家内にも子分達にも誰れにも真実を語らなかった。或る日の事、大組の頭が病気見舞に来たと家内が言う、私は知らん顔して彼に会った。

あの長崎一の親分である大組の頭が、又私の命を狙った彼が私の処へ来るなんて不思議な位だ、然しこれも男度胸の見せ処だと自分自身に言いきかせ、何くわぬ顔をし会ったのである。

「堺屋親分!!御怪我なさったそうですね、どうですか病状は？これから私はあなたの弟分になって仕事をしてみたい、是非御承知して下さいよ親分!!

これはホンの心持の御見舞金です、どうぞお納め置き下さい」と言う

私はトウ〳〵彼の言葉を承知した。

実はあの事件の時監視人が誰かにやられたと確信があったので早速警察へ手を廻し会社とも相談して調査した結果、真犯人は判った然し何しろ真の被害者の堺屋からは何の一言もそれにはふれない、只自分がころんでの怪我と言うのであるから公にはならない、又手も下し様もないと言う訳。

その度胸にほれこんだのが当の大組頭である、と言う次第で、全快後はトントン拍子に事業も発展し会社への信用、警察からの見方世間からの見る目等は何れも上々吉々となったのである。

（つづく）